

夜と陽炎

夏物語 * *

岡田健

夜と陽炎

耳の物語

開高 健

新潮社版

よる かげろう
夜と陽炎
みみ ものがたり
耳の物語 ***

著者 開高 健

昭和六十一年八月二十五日 発行

昭和六十一年九月十五日 二刷

発行者 佐藤 亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 大口製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一四〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

夜と陽炎

耳の物語
**

最高の書物とは、読者にわかりきっていることを語ったものだと、彼は悟ったのである。

G・オーウェル「一九八四年」

焼跡が消えた。

ある日、町を歩いていて、ふと眼をあげることがあり、廃墟と荒野が消えたことを痛感させられた。どこもかしこも道路が狭くなり、赤くなく、視線が、壁や、ドアや、窓でさえぎられて、地平線がどこかへ消えてしまった。黄昏になると、見たすかぎりの赤い荒野のあちらこちらに防空壕があつて、入口から細い炊煙がたちのぼり、七輪のまわりで子供が歓声をあげてころげまわったり、モンペ姿の母がうなだれてのろのろと穴に出たり入ったりという見慣れた光景がどこへいつても見られなくなっていた。無辺際だった瓦礫の荒野は区切られ、細分され、コンクリートに蔽われている。家とビルでぎっしりと埋められ、市はたちあがつて肩を聳やかしたり、両足を踏ん張ったりしている。風や雨は山野のそのようでなくなり、骨を噛む力も意志も失っている。市は全裸ではなくなり、たとえば天王寺一带は丘であることが肉眼に見えなくなり、その頂点である

はずの駅前に住んでも、もはや地平線にゆつくりと沈んでいく夕陽を直視することができない。

まるで手品のようなものである。あれだけの異変を消してしまうには何年間かにわたって老大な数の人と物が動員されたはずで、それを毎日毎日、つぶさに目撃していたはずなのに、何ひとつとして思いだすことができないのだ。一切の転変ぶりにあらためて茫漠とならされるが、その過程をまったく思いだせないでいる自身の空白ぶりにとも茫漠とならされる。ひたすら外界におびえたり、すくんだりして暮してきたはずなのにその外界が見えないのだ。これには驚いていいはずなのだが、どう驚いてよいのか、その手がかりすらない。まるで繭のなかで眠りこけていたみたいである。荒野の記憶はつい昨日の黄昏時のことのように思いだせるけれど、すでにそれは博物館物となったらしかった。と、するなら、まだ二十代前半なのに、自身すらすでに博物館物となってしまったのではあるまいか。繭のなかで眠りこけつつ乾からびてしまったのでは？……

一人の機敏な男が、もはや戦後ではないといいだし、それが流行語になっている。焼跡で汗を流したり、工場で油まみれになったり、資金繰りに日夜狂奔したりした男たちが大状況を現出したのであって、機敏な男はその尻馬に乗ったにすぎなかったが、深夜の独白が流行語になってしまうと、人びとはそれをキーとしてもうひとつ新しいドアをひらき、猥雑だけれど老大なエネルギーを解放しつつあった。軍隊毛布をぎつくばらんに切ってハーフ・コートにし、いかつい軍靴でのろのろと歩きまわっていた群集は消え

た。闇市の放埒な叫喚は消えて、市場の夕刻の健全な叫喚となり、暖をとるための駅前
 の焚火もなくなった。大群集はターミナル駅の朝と夕方のサラリーマンのそれだけとな
 り、郊外電車は車軸受けの鉄箱から油煙をたててくすぶったり、乗客が窓から入ったり
 ということはなくなり、窓はすべて板やダンボールにかわつてガラスになり、誰も割る
 ものがなくなった。町には国産のルノーの四ツ馬印（４ＣＶ）がかけまわり、カブト
 虫と呼ばれて愛され、どこかで酔っぱらつた柔道選手が体当りしたら自動車そのもの
 がひっくりかえつたという噂があつた。家庭にはようやく電気冷蔵庫が回り、神
 器という評判である。酒飲みたちはどんな夜ふけにへべれけになつて家へ帰つてもピ
 ンとした角氷がいくらでも手に入るということを知つて、雀躍した。焦熱の咽喉と干か
 らびた胃を鎮静させるのに、それまでなら暗い台所で水道の水を一杯ひつかけるだけだ
 ったのが、作りたての冷んやりとしたアイス・ウォーターが心ゆくまで、女房の叱言ぬ
 きで飲めるようになったのである。女房は女房でそれまでのようにいちいち氷屋へいっ
 て重い氷塊をはこんでもらうように注文しなくてもよくなったので、亭主の口の怪臭に
 はうんざりしながらも、いちいち寢床から起きださなくてもよくなったので、口ではあ
 いかわらずブツブツいいながらも、内心ではホクホクしていた。技術の変化は習慣の変
 化を呼びだし、それは舌にまで及ばずにはいられないから、ドブロク、マツカリ、バク
 ダン、焼酎に飽いた男たちはつぎの何か新鮮なドリンクを求めずにはいられなくなつて
 いた。新鮮で、ドライで、しかもお脳にクラツとキックのくるやつ。そして薄暗い掘立

小屋でもつれあつて飲むのではない場所を……

テレビはまだ登場していなかったけれど、ラジオではすでに「民放」が開始されていて、あらゆるスポンサーがあらゆる文体で人民の耳たぶにとどまろうと、狂騒を開始していた。コマーシャル・メッセージ、CMというものが氾濫しつつあった。誰しにも軽視されながら誰しもが記憶せずにはいられず、何年かたつてふりかえると当時の新聞や雑誌のどんな名論文よりもはるかに皮膚に融即して自身の日々を喚起させられるたわごと、図太くて破廉恥なくせに泡のようにはいかないバカ、鋭いくせに無気力で無署名のでたらめ、これが不逞に、浮き浮きと、登場しつつあった。

洋酒会社の宣伝部員になつてこの未開の学田におずおずと鋏を入れることになった。

もともとルンペン時代に女の口ききで社長を紹介され、見よう見真似で書いた原稿をはこびこんで、一枚五〇〇エンで買ってもらつていたのである。それでドライ・ミルクを買う一助としていたのだが、出産後、女が会社勤めを苦痛に感ずるようになったので、交替で入社することになり、正式に社員として採用されたのだった。「文案屋」の見習いとなつてスタートしたのである。「コピーライター」という呼びかたはまったく知られていず、身辺の誰一人として口にするものもなく、業界の雑誌でもまったく見かけることがなかった。たまにアメリカの広告界の雑誌などを見ると「コピーライター」という単語を発見し、文案屋のこととわかったが、「コピー」をふつうに「複写」と解釈して、明けても暮れても似たようなことばかり書いてるので複写をとっているようなも

のだからそう呼ぶのだろうぐらいに理解しておいた。そうとってみると何やらヒリヒリした皮膚が感じられて、トイレの暗がりにはやがみこんで思いつめていたときなど、ふと微苦笑できた。

会社は毎朝、九時に始つて五時に終る。一階に宿直室のような小部屋があつて、無口なじいさんがウドンを用意している。社員は食券をさしだし、自分でウドン玉を大釜の湯ですすいでドンブリ鉢に入れ、じいさんの作ったダシと薄揚げの煮たのをほりこんで、食べる。ときどき社長や重役が気まぐれを起して入つてくると電流が走つてみんな黙りこんだ。退社時刻は五時だけれど、何となくグズグズして六時か六時半まで待ち、梅田まで歩いて地下においてトリスバーに入り、何杯かひっかけるというのが習慣になつた。宣伝部の部屋にはウイスキーでもブランデーでもごろごろと瓶があるけれど、そして五時以後ならいくらでもおおっぱらに飲めるけれど、一つの心理があつて、身銭を切らなければ飲んだ気になれないのである。映画会社の試写室でタダで見る映画がつまらないのと似た心理である。サラリーマン暮しをすると、上役や仲間と口をきかなければならず、内気の過敏症には苦痛でならないが、酒にそそのかされて、少しずつ殻から外へ歩きだすことができるようになった。

毎月、月末になると、規則正しく月給をもらえることになつた。その額は他社とくらべて多過ぎもせず少過ぎもしない。暮しの必要条件はどうにかみたしてくれるけれど、十分条件をみたすことにはならない。しかし、つましく、おとなしく、何事も人並み

にやっていたら、忍耐についてはいささか訓練が積んであるので、何とかやっていける。ブタの尻ツ尾を食べなくてもいいし、焦躁の青い火で正面とお尻の下からあぶりたてられなくてもよくなった。おかげで卑屈さが少しずつ下潮のようにひきはじめ、かわりに月賦で背広一式を買おうか、それとも電気冷蔵庫にしようかという打算がこころを占めるようになった。それまではこころそのものが鬼火と感じられ、すべてが非定形であらえようがなかったのに、何かの凝固剤を注入されたかのように形が、数字が登場して、威力をふるいはじめた。汨濫であった水がパイプのなかを流れるようになったのである。それは何よりもまず酒の飲み方にあらわれた。それまではミナミの千日前のパイ飲屋で焼酎をすすりつつドテ焼の串を頬張ったものだけだ、そのあいだのべつにボケットのなかの銭を指さきでかぞえていなければ安心できなかった。そして心細さがわくわくと脛を這いのぼつておちおちとしていられず、一杯目がすんだところで二杯目を注文したものがどうか、苦慮また苦慮であった。しかし、いつぱしのサラリーマンになってからは、いきつけの店ができたうえにツケがきくようになったので、少くともカウンターの肘をつくことができるようになり、どう肘をついたものかと姿勢を考えることができるようになった。酒のサカナの最高はドテ焼でもなければ噂さに聞く西洋松露入りのストラスブルのフォア・グラでもなく、いささかのゆとりをもつて肘のちよつとそばにのいた自身のこころであるということに気がついた。仕事の出来ぐあいや、人間の出入りや、うまくわたりあえたかどうか、いつもどこかにほろにがい味の漂うその日一日の後

味を聞きつつ飲むものであるらしいと、やっと端緒がつかめたような気がした。本の構造でいえば、どうにかこうにか“はしがき”や“序”が読めるようになったというところである。

しかし、だからといって、古人のいう“安心立命”からは、はるかにこころは遠かった。一皮を剥ぐと、すぐにつぎの一皮があらわれる。あらわれたままでじつとしていくれたらいいが、その質と量が見きわめられないうちに、おれをどうしてくれるのだとせがみはじめる。一つの原則をどうにかこうにかここに強制して納得させたと思ったら、思いもかけない例外がつぎつぎに登場してくる。原則に執っているのか、例外に執っているのか、それがわからなくなり、ときあつて沸騰してくると、原則そのものが朦朧となってしまう。ときあつてどころではない。のべつである。崩れたところを容赦なく足もとに吹きつける冬風の鋭さでどうにかこうにか支えてドテ焼を頬張っていた身分が、まがりなりにも“バー”に出没、明滅するようになる、飲みつけたグラスが新しいグラスに変った瞬間、冷んやりと硬くひきしまつて気持のいい唇への一触、その瞬間に、生涯はこれできまってしまったのだという思いに襲われる。何もかもが見えてしまうように感じられる一瞬があるのだ。それが何度にもかさねているうちに、一瞬どころではなくなり、夜の地下の酒場で発火したものが白昼に燃えうつって、新聞用の広告のたわごとをあれかこれかと苦吟しているさなかにも、顔をつきつけてくるのである。その顔はまじまじと直視するしかなく、眼のそらしようもない。朝の十時か。午後の三時。

いたたまれなくなって席をたち、階段をおりて、歩道へ出ていき、いいかげんな喫茶店へいつて、コーヒーをすすったり、甘ったるいケーキを食べたりして、眼をそらすことにふける。しかし、喫茶店から出てオフィスにもどるとき、直視の鋭さは避けられたとしても、いやらしい後味はのこっていて、どこまでもつきまとってくる。一生、こうなのか。ただ繰り返すだけなのか。昼のうちは会社でたわごとを書くことにふけり、夜はバーでぐずぐずしたあと家にもどって本を読むだけなのか。それで終っちゃうんだな？……

毎朝、淀屋橋の地下鉄の出口から歩道へおしだされ、とことこ歩いて、一つの橋にくる。それをわたったすぐのところはベチャ・ビルがある。会社の古風で小さな、暗い入口がある。そこへ入るまえに橋の上に佇んで、ちよつと待つ。堂島川は兩岸をしつかりコンクリートで固めてあるので、川というよりは溝である。両側には草もなければ、土もなく、水中には藻が生えていないし、乱杭も見られない。しかし、橋の手すりにもたれてしばらく待っていると、川下からよちよちと一隻の手漕ぎの古舟があがってくる。おっさんはあちらへよろよろ、こちらへよろよろと一本櫓を操って寄っていく、水中から木の枝をたばねたオダをひきあげる。オダの下に網を持っていつてオダをバタバタふると、網にウナギが落ちる。そのウナギをおっさんは破れかぶれの竹籠にさりげなくほりこみ、ゆらゆらと舟を漕いで上流へのぼっていく。この川漁師を見るのが毎日の愉しみとなった。少し早く橋につくと、おっさんと舟が見えるまで、いつまでも待ち、

ウナギがたくさんとれるかどうかを見とどけてから、橋をわたって会社の暗い入口へ入っていくという習慣になった。ただ何となくそうせずにはいられなくなったのでそうするまでのことなのだが、ウナギが二匹か三匹かと気になりはするものの、清潔な朝の日光とよごれた水という光景のなかで、おっさんの腕や、肩や、腰がどううごくか、それを見とどけずにはうごけない。もしおっさんが予想外の数のウナギをとると、何かいい日になりそうな気持になって歩きだすことができる。

同人雑誌はとつくに解散し、同人はちりぢりばらになり、古寺に集って焼酎をすすりながら議論に没頭するということもなくなった。同人雑誌を送って思いがけず東京の佐々木基一氏から励ましの手紙を頂き、何か書けたら送ってみるようにとの言葉を頂いたので習作をいくつか送り、『近代文学』に発表してもらったが、活字になったのを読みかえてみると赤面するしかない幼稚さであった。その『近代文学』も発行が間遠になり、とぎれがちである。何よりかより、書きたい衝動が消えてしまい、何を、どう書いていいかわからず、書けないことの煩悶や焦躁も感じない。もちろん作家になりたいという気持の起りようがなく、ウィスキーの宣伝文を書くだけが精いっぱいのところである。ほかには何の技も能もないので、これにしがみつくななく、一生酒浸りで終ってしまうことと、思いきめていた。毎夜、毎夜、本を読むことだけは中毒になったみたいで、手あたり次第にめちな乱読、雑読にふける。そして何を読んでも、すべては書かれつくしてしまった、あらゆる発想で書きたいように書かれてしまったと思うし

かなかった。ごくたまに何か書いてみようかと思うことがあるが、書きだしの一語、一行はことごとどこかで読んだ他人の文ばかりで、そのとめどなさに圧倒され、窒息してしまつて、ペンをとりあげることすらできない。それまでとはちがつた質の憂鬱と倦怠があらわれて澱みこみ、腐潮が体内につまつて、顔をあげる気力もなかった。

この頃、一つの声を聞いた。

それまでに味わつた肉体労働の経験によると仕事が単純であればあるだけ疲労しやすが、午前十時頃と午後三時頃にもっとも濃くなる。ことに午後三時の疲労は濃くて深く、思わず顎をだしてしまいたくなる。それはサラリーマン生活でもほぼおなじだとかつた。三時頃になると、誰いうともなく席を一人たち、二人たちして喫茶店へ出かける。喫茶店はどこもかしこもあちらこちらから落ちこぼれてきたサラリーマンで満員になり、人声とタバコの煙りがたちこめて始発駅のようなにぎやかさである。そのせいかどうか。この時間帯のどこかで、ビルのなかの物音という物音がいつさいがっさい途絶えてしまうような瞬間を味わうことがある。人声、タイプライターの音、靴音など、何もかも消えてしまうような瞬間である。ものうい気遠さがたちこめて、机のまわりに澱む。全市が表通りでも、露地のゴミ箱のかげでも、このとき一瞬、仮死に陥ちこむのではあるまいかと感じられる。それからいつせいに響きと怒りがよみがえり、人も市も声も黄昏めざして足音たてて走りだす。

ある日の午後、そんな時間帯にトイレに入つて薄暗がりになやがみこんでいると、と